

変わり始めた物流への意識

規格化、効率化でさらなる品質向上を

物

流の研究に携わり50年になりますが、深刻なトラックドライバー不足をはじめ、物流危機が叫ばれる中、ようやく日本でも物流に対する意識が変わり始めたと感じます。世界で評価される日本のものづくりは、品質と効率性を追求し、「ジャスト・イン・タイム」という素晴らしい思想を生みましたが、一方、物流にとっては非効率な働き方につながった面もありました。物流業者に遅刻は許されない。最近でこそ効率的な配車システムが普及しましたが、2~3時間前にトラックが荷主の元に着いて待つ光景は、今も“当たり前”です。

運送会社のトラックドライバーは当然のように、メーカーの依頼に応じて倉庫で荷物の積み下ろしを担ってきました。パレットやフォークリフトなどを使わず、3~4時間かけて手作業で荷物を積み込み、届けた先でも、またトラックドライバーが3~4時間かけて荷物を下ろす習慣がいまだにまかり通っています。

こうした商慣習の背景にあるのは、下請け会社に対する減点主義でしょう。物流会社は圧倒的に中小企業が多い。時間通りに来ない運送会社、依頼通りに荷物を積み込まない運送会社は、荷主から切られても文句は言えないのです。

荷主の要求を第一に優先したために、物流の規格化も後れを取りました。かつて大手電機メーカーが商品の梱包に使う段ボールを調べると、1000を超える種類がありました。当然ながら、荷物のサイズや形状が違えば、運送は非効率になります。

海外では荷物の段積みを使うパレットなど、物

*
有訓
無訓



上智大学名誉教授
荒木 勉

流ツールの規格化が進みましたが、日本ではバラバラ。各社の倉庫も規格が統一されていないので、せっかくパレットで運んでも、納品先の倉庫の棚のサイズに合わず、入らないといった不都合もよく起こります。技術の活用もなかなか進みません。いまだに物流の現場では、電話やファクスの受発注が珍しくありません。バーコード管理などは導入されましたが、ICタグを使えばもっと迅速に大量の情報を一度に送ることができます。ある会社の倉庫でICタグの実証実験をしたとき、パートさんが「これ以外、使いたくない」と漏らした言葉が忘れられません。

物流の品質を上げようと教育に力を入れてきた結果、人材も育ってきました。ただ、今後は物流担当者だけでなく、商品開発担当者も、営業の担当者も、物流をもっと意識してほしいと思います。輸送効率を考えれば、商品のサイズはもちろん、現場の働き方も、さらには環境対策を含めて物流が変わり、経済全体ももっと変わっていくはずですよ。

物流現場の規格化・デジタル化を通して効率を高め、今ある設備や装置をフルに有効活用して、最適な形でモノを届けるというアイデアがフィジカル・インターネットです。私が、この究極の物流シェアリングを推進する目的もそこにあります。

企業の経営者にも、物流への理解を深めてほしいと思います。自社の商品を運ぶ機能という認識にとどまらず、社会に大きなインパクトを与えるものであることを、ぜひ理解して、物流改革を後押ししてほしいと考えています。(談)